nanako-fifteen

II

第四章

いなくなっちゃった！

呼んでも帰ってこない！

a.minemura

nanako-fifteen　Ⅱ

登場人物
4・いなくなっちゃった！　呼んでも帰ってこない！
051.
052.
053.
054.
055.
056.
057.
058.
059.
奥付

登場人物

間宮 ひろ	高校二年生　陸上部で活動中のスポーツ少女
桧山 健	大学生　ひろと同じマンションの住人
新城 富夢（とむ）	(株)新城不動産の社長でマンションのオーナー
新城 なおみ	新城不動産の専務　社長夫人
権田 トオル	高校生　柔道部と華道部の両方に籍を置いている
河合 ヤスオ	高校生　陸上部のマネージャー
河合マスター	ヤスオの父　お好み焼き屋「かわい亭」の店主
間宮宮司	ひろの父　神社の宮司
ななこ	記憶喪失の幽霊

４・いなくなっちゃった！　呼んでも帰ってこない！

051.

　ひろは強い目眩を覚えてよろめき、はっと目を瞬いた。誰かに肩をつかまれ、揺さぶられたのだとわかるまでにしばらくかかった。意識が完全にどこか別の世界へ入り込んでいた。もしかしたら立ったまま眠って夢を見ていたのかもしれない、そう思えるほど、眼前で繰り広げられたななこの変身はリアルであり、幻想的で、心奪われるものだった。

　ななこは！？　とみれば、素足に白いローンの夏物のワンピース姿だ。異世界の雰囲気などどこにもない、ただ夏物に着替えただけだというようにさっぱりとした顔つきだった。だがひろとその肩をつかんでいる桧山とをみて、あわてていた。
ひろはななことのやりとりに夢中で桧山のことをすっかり忘れていたのだ！

「あ！　あああああの、――なに？」

　桧山が一度もみせたことのない険しい顔をしているのにびっくりして、ひろは間のぬけた声をあげた。それはいっそう桧山を怒らせた。つかんでいた肩をつきはなす。ひろはまたくらっとよろめいた。

「おまえは――」彼はなんとか激情を押し殺そうとし、ひどく低い声で言った。
「――ここで誰かと待ち合わせしてるのか？」
「――え。――ちがう」
「じゃあ、さっきオレがたずねたことに答えろ」
「え、えっと、ごめんなさい！　あたしずっとぼんやりしてたみたい！　――なんでしたっけ？」
「なんども同じことを言わせるな。おまえの部屋に同居人がいるんじゃないかと訊いたんだ。おまえのお父さんもそれを心配していたんじゃないのか？　マンション側の規約からすれば違反にもなる」
　事務的な言い方をせずにいられない。
「ど、どうきょにん？　えーと、そ、そうね、いるよーないないよーな、いないよーないるよーな」
「オレは、おまえの待ち合わせにつきあってるヒマも、冗談につきあう気もない」
「あ、あの、待って――」
「待つつもりもない。――もういい」

「あ……」
「荷物だけは車で運んでやる。事務所に置いといてやるから、自分で部屋まで持っていけ」
「え、ちょっと」
「おまえは待ち合わせしてるヤツに送ってもらえばいいだろ」

　桧山は捨てぜりふのように言い、ひろに背をむけて行ってしまった。いやもおうも、とりつく島もなかった。

「ごめん！　ひろ！」
　ななこが胸の前で手の平どうしを合わせ、拝むようにしながらおろおろと言った。
陸上部の後輩の子に「ひろ先輩！　ごめん！」と言われているようで、こんな際にもかかわらず、ひろは口元が緩んでしまった。さっきの異世界の美少女の威厳など、どこにも見当たらない。もしかしたら見間違いだったのかもしれない。

「私がいけなかったわ！　桧山さんほったらかして、あなたをつかまえてたんだもの！　お願い、すぐに追いかけて！」

　だが、ひろはどういうわけか、追いかける気が起こらなかった。
　――なんて思い込みが強くて、おせっかいなんだろ、桧山って！　あたしが誰と住もうがあんたには関係ないじゃない！

　いつのまにか、また呼び捨てに戻っている。

　――もういいってんなら、あたしだって、もういいわよ！　べつにあたしから頼んで迎えに来てもらったわけじゃなし。荷物だけ運んでくれればおーだすかりだわ！

「ひろ！？　どこ行くの？　駐車場はあっち――」

　――冗談じゃないわ、あいつの車に乗せてもらうなんてさ！　あたしは自分の足で歩いて帰るの！

「そんな、ちょっと待ってよ、ひろ！　もう暗くなってきたわ！」

　ひろになにか言ったあとはたいてい自己嫌悪におそわれる桧山だった。
　ひろの部屋の同居人など、管理責任者の新城が気づいていないなら、放っておけばいいことだ。彼には関係のないことだし、入居者のプライバシーに首をつっこむ面倒などご免こうむりたいし、もっとも逆に管理人には黙っててやることにして、口止めを要求する手もあったな、と自分でもバカバカしいと思えることをこねまわした。

　公私混同している自覚はあるのだが、ひろのしれっとした顔をみているとどうにでも因縁をつけてやりたくてたまらなくなり、抑えがきかなくなってしまうのだ。元々、対人関係の淡白な彼だが、ことひろのこととなると、『我を忘れて』しまう。一時は、ひろが好きだからだ、と結論づけたみたが、それでくくれるなら苦労はしないというものだった。
　自分で自分が御しがたい。
　抑えておけない。
　ひどく圧力の高い、説明のつかない衝動が胸のあたりで渦をまいていた。胸が痛い。彼は苦しい発作をおこしたようにそこを左手で強く押さえた。
薄闇が降りかかり、さいごの残照が湖面で照り映えて燃えていた。

　ひろは頭に血を上らせて足を踏み出したが、数歩もいかないうちに立ち止まった。
　若い男がひとり、右手からぶらぶらと近づいてくる。そしてもうひとりが左側から。
　あっと思い、あたりを見回してみるが、ほかに人はいない。 さっき桧山がひろにつめよっていたとき、尋常でない様子に恐れをなして、誰もがよけて通っていたのだ。

「おじょ～おさん」
　どことなく下卑た物言い。顔は愛想良く笑っている。
「ふられちゃったのかなあ？　もしかしてえ？　どうやっておうちにかえるのかなあ？」

　ひろは内心あ～、しまったと思った。財布も携帯電話も合宿の荷物といっしょに車のトランクの中だ！　桧山といっしょだったからなにも持たずに夕涼みに来てしまった！

　左側の男は一度ひろの脇を通り過ぎて戻ってきた。前の男は細くて小柄だが後ろの男はかなり大柄で、背後に立たれただけでひろは圧迫感を覚えた。背中を冷たい汗が流れ落ちた。
　前と後ろからはさみうちするタイミングは息が合っていて、何度も同じことをやっている手馴れた印象があった。

ひろは知らなかったが、桧山が一度駐車した場所でにらみつけてきた、あのふたりづれだった。桧山が男女のふたりづれと思ったふたりは、どちらも男だったのだ。

「ボクたちがおうちまで送ってあげるよ。ね？」
背後の男が身をかがめて、生臭いにおいをさせながらひろの耳元で親しげにささやいた。

ななこは走った。空中を移動することもできたかもしれないが、動転して思いもつかなかった。

――ひやまさん！！　とななこは叫んだ。桧山は車に乗り込もうとしていた。
――ひやまさん！！　ひろを助けて！！　ひろを……！！

053.

桧山はするりと運転席に滑りこんだつもりが、車体の枠に頭をぶつけた。
ダッシュボードの上に携帯電話が置きっぱなしになっていて、手にとって見ると着信があった。案の定というかなんというか、相手は新城社長で既に何度もかけてきていた。
かけ直そうとして思いとどまり、助手席に電話を放り投げて、外へ出た。
ひろの迎えは社長からの依頼だった。途中でけんかになって荷物だけ乗せて本人は置いてきた、などという報告が通るわけないと思ったのだ。
ひろの顔をみるのもいまいましいが、まだその辺にいるはずだから、とっ捕まえてとにかく車に乗せてしまおう。社長に電話するのはそれからでいい。マンションに帰ればまた小言が待ってるかもしれない。だがあれもそれも、これでおしまいだ。あと二週間もすれば――この国とはサヨナラだ。

駐車場から隣接している公園に入ろうとして男女が言い争う声を聞いた。痴話げんかのたぐいだろうと思ったが、声のする方をみるとさっき一度車を止めようとした場所だった。隣からにらみつけてきたくだんの男が若い女を車に押し込もうとしている。ドアと男の体の隙間からポニーテールが激しく揺れるのがいっしゅん見えた。
まさか、と思った。

「ひろ！？」

　ドアのかげでもがいていた女が声をはりあげた。「きゃあああああああ！！」

　運転席からもうひとりの男が細い顔を突き出した。
「もたもたするな！　黙らせろ！」「たすけ……」「エンジンかけろ！」

　間違いなく、あばれている女の声はひろだ。
　騒ぎには気づいたものの自分の散策がなにより大事な観光客たちを押しのけて、桧山は走った。

「ひろ！！」「……！！」後部座席にうつぶせの体勢で押さえ込まれていたひろの動きがふと止まった。ついでスニーカーの足がはね、背中を押さえつけていた男の向こう脛を思い切り蹴り上げた。
　いてぇっ、と喚く男の力が抜けるのがわかった。ひろはすかさず起き上がり、振り向きざま自分を押さえつけていた男の下腹あたりを蹴飛ばした。
男は腰を引きながらドアに思いきりからだをぶつけ、いてぇっ、と喚いた。
　運転席の細い方の男が「ばかやろー」とひそひそ声で罵る。「静かにやれ！　ドアがゆがむ！」
　ひろはあちこち痛がっている男の脇をすばやくすり抜けながら、あっかんべーをするのを忘れなかった。
「なによ、ひとの体に気安くさわんないでよ！！」

「なにをやってるんだ！　こっちへ来い！」

「桧山さま！！」
　ひろはうれしそうに声をあげ、だっと走ってきてすばやく桧山の背後に回りこみ、彼を盾にとった。
「ほーら、どっからでもかかってきなさいよ！！」

「あのなあ」なんてすばしこくて調子のいいやつなんだと内心、感心しながら桧山は言った。
「言っとくけど、オレは殴り合いなんかやったことないぞ」

「――うそ。どうしよう、わたし死んじゃうの？」
「うそじゃないし、死ぬこともないさ。――逃げよう」

　さっき蹴り上げ蹴飛ばして痛めつけてやった男が血相を変えて追いかけてきた。運転席の細面も車から降りてきた。加勢するつもりだ！
　ひろは心底情けなくなって、ほとんど本気で桧山を盾にして逃げようと思った。と、そのとき。
　大型の外車が駐車場に入ってきた。

054.

　大型の灰色の外車はおごそかに駐車場に入ってきて、新城不動産のロゴの入ったワンボックスの隣にお行儀よく納まった。
　中から堂々と現れたのはもちろん新城社長の小柄な体だった。桧山とその背中にぴったり貼りついているひろをじろじろとながめてボソッといった。
「ナニをやっておるのかね？」
　ひろはぱっと飛び退った。「な、ななななんにもしてないわよ！」
「そーかね、仲良くよりそってるよーにみえたんだがね」

　桧山はあわてて社長とひろの間に割って入って二人組の男を指差した。

「社長！　こいつら痴漢です、誘拐未遂です、駐車拒否及び威嚇の常習犯です！！」
「てめえこのやろう！」「いいかげんなことチクってんじゃねえよ！　社長さん、ぜんぶうそっぱちですよ！」
　二人組はつられて抗議に出た。逃げるのをすっかり忘れていた。
　社長は桧山をちらっとみてから言った。「あー、ぜんぶうそっぱちかもね」

　二人組はそろって鼻腔を膨らませ、それみろ、と勝ち誇ったが社長の話は終わっていなかった。社長はびしっと二人組の車を指差した。
「しかし！　この車は盗難車だ！」

　みんながええっとそれぞれおどろくのをみて、社長は悦に入った。「盗難届けの出ている車がこの駐車場に止まっているという通報があったのだ、所有者が言ってきたんだからまちがいない！」

　二人組の鼻腔はみるみるしぼみ、たがいを横目でうかがっていた。浮き足だち、逃げるタイミングをはかっているのがみえみえだった。
　社長は両手を肘からもちあげ手のひらを上にむけて、『やれやれ』のジェスチャーをしてみせたがぜんぜん似合わなかった。
「まったく、なんてわかりやすいんだろうねえ、キミたちは」
「だけどおじさん、なんでおじさんがそんなこと知ってるの？」
　社長は胸を張った。

「よく訊いてくれた、ひろ！　ボクは町会の防犯部長さん！　今、交番に寄ったらお巡りさんが出動するとこでね、ボクは一足先に来たと、そういうわけだ」
　かれの言うとおり、回転灯をつけたパトカーが湖岸通りをやってくるのが見えた。新城社長は、腰に両手をあてがい、からからと笑った。

　はっはっはと哄笑しつつ二人組をお巡りさんにひきわたすと社長はすかさず、鋭い矛先を桧山に向けた。
「ところで、キミはなにをやっておったのかね！　またちっとも帰ってこないわ、いつものように電話には出ないわ、まったく、ほんっとにきみはだね――！！！」
「お、おおおおおおじさん、引き止めたの、あたしよ、夕陽がみたいなー、って！　だから桧山さんはいやいや私につき合ってただけ！！」
「夕陽ねえ……うん……そうだった、今日の夕陽はすごかったねぇ」
「ああ。みごとでしたよ」
「そうよ、とってもきれいだった！！　あたし、きっと一生忘れないわ！！」

055.

　ひろの「一生忘れない」というせりふには様々な背景があったのだが、この場面においてかなりのインパクトがあった。

　新城社長は「そ、そうかね」とつぶやきながらそそくさと立ち去ってしまった。かれは町会の防犯パトロールの仕事をしに湖岸公園までやってきたのだった。

　車の窃盗のほかにもろもろの余罪がありそうな二人組の捕り物が終わってパトカーが行ってしまうと見物人たちは三々五々引き揚げていき、駐車場にはひろと桧山だけになった。
　なんとはなしに帰りがたく、しばらく夜風に吹かれていると、ひろのおなかがくうと鳴った。赤くなってあわてておなかをおさえるひろをみて、桧山は「なんか食べにいこうか？」と言った。
　ひろはうなずきたかったが、できるだけていねいに、誘いを断った。先ほどからななこの姿がみえない。ななこのことだから黙っていなくなることはないはずだ、と思ったが、決心を固めたような様子をみせていたのが気がかりではあった。たぶん、ひとりでマンションに帰ったのだろう。でも姿をみるまでは安心できなかった。
　もう一度ななこと話し合って、明日こそ、桧山に話そう、彼女のことを。
夜風が通り抜けるマンションの駐車場で、トランクから荷物を出そうとしている桧山のシャツをつかみ、ひろは彼を見上げた。

「……」
「……なに？」
「……私を、信じてくれる？」
「……信じろ、と言うなら」
「……信じてください」
　針葉樹の香りがふわりと近づき、離れた。
「わかった」

　エレベーターにひとりで乗り込み扉がしまってしまうと、ひろは荷物を足元に置き、両手で顔を覆った。清冽な涙がその手を濡らした。

　ななこはひろの部屋にいた。
　その姿を認めたとき、ひろは心底胸をなでおろしたい気持ちだった。どこへも行かないでくれて、ありがとうと言いたかった。
　彼女は夕刻時にみせた白いワンピース姿でひろのベッドで眠っていた。寝姿はのびのびとは程遠く、なにやら窮屈な姿勢だった。ひろの帰りを待って煩悶するうちに寝入ってしまったのだった。

　ごめんね、とひろはいくらか眉をしかめた寝顔に話しかける。
ななこへの、ごめん、にはいくつもの意味があるのだが、それを数え、整理するには、ひろもまたくたびれていた。いろいろなことが一度におこった日だった。

　一生忘れないだろうと思えることはひとつふたつではなかったのだ。
　おやすみ、と語りかけながらななこのワンピースのすその乱れを想念の上で直してやる。
　からだはひどく疲れていたが、心はこの上なく安らかだった。
　おやすみ、桧山さん、とつぶやいて、ひろはななこの傍らに倒れこんだ。

056.

　昼間社長から言い付かった仕事を整理し、防犯パトロールから帰ってきた社長の世間話につきあい、桧山が自分の部屋へ戻ったのはかなり遅い時間だった。
　長くて暑い一日だった。
　なにも考えず眠りたい。今夜はすぐに眠れそうだ。

　その前にシャワーだな、と考えながらベッドの縁に腰をおろすと、電話が鳴った。
　携帯ではなく、デスクに置いてあるほうだ。こっちの番号を知っている者はあまりいないが、さて誰だろう。立ち上がるのが億劫でしばらく放っておいたが、鳴り続けるのでしかたなく、受話器をとった。

「もしもし」
「――健？」
「――――」
「――あたし」
「なんだよ」彼は少々うんざりして言った。
「なんだよとはなんだい！！　それが親にむかって云うことばか！！」
「普通に電話してくれませんか！」
「あたしゃこれが普通なんだよ！　なにやってたんだよ、こんな時間まで！　さんざん電話したよ！　夜遊びかい！？」
「バイトですよ」
「ああ～、あんたならホストくらいつとまりそうだよ～！　そこ一応観光地だし、そういうお店いっぱいあるんだろ？　かあさんにも紹介しておくれよ」
「それが息子に向かっていうことばか」
「あのさ、忘れてもらっちゃこまるが、あたしらは他人だよ、いっとくけどね。だからあたしらの間になにがおこってもおかしくない」
「ところでなにか用？」
「あ、華麗にスルーしてくれたね。真に受けられてもこまっちゃうけどさ」
「用がないなら切るぞ」
「健ちゃん、あんたさ、西ノ宮、ってひと、知ってる？」
「……西ノ宮？」
「うん、女の人なんだけど、きのう電話がかかってきてねえ、息子さんご在宅ですかっていうもんだから、ウチには息子四人いますけど、どれでしょうって聞いたんだわ。そしたら間違いなく、あんたのことなんだよ。四人並べればあんただけ毛色が違うもんね」
「……なんだろう……」

　養母のいう相手の電話番号は、知っている。が、かけたことはない。

「なんでも、娘のことで、って言ってたよ。……ねえ健ちゃん、あんたもしやかあさんにいえないようなことを……」
「なんだよ？」
「だからさあ。その娘さんとできちゃったとか。それで親御さんが」
「あのねえ！　オレの知ってる西ノ宮って子は三年前に死んでるよ！」

「三年前……ああ、ああ、ああ……そういやそんなことあったねえ！　あんたと正弘が高校卒業した年にねえ！　なんか聞いたことのある名前だと思ったら、ああそう！　――それが今ごろなんの用？」
「さあね！　なんだかわからないけど、あしたにでも電話してみる」
「ああそうしてよ。かあさんの用はそれだけ……そうだ、芳絵さんがあんたによろしくって言ってたよ。正弘たちが夏休みで帰ってきて暑苦しいから、実家へ帰ってもらってるけど」
「義姉さんか、その後どう？」
「元気だよ、一見ね。そりゃあんなことのあとだから、元気なんて空元気に決まってる。見ちゃいられないから帰ってもらったんだ」
「……」
「健ちゃん」
「え？」
「正信も正弘も女っけがないし、もてそうにないからねえ、あとはあんただけが楽しみだ。お嫁さんもらうときはうちにつれといで」
「オレまだ学生だよ」
「学生だとかそうじゃないとかそういう問題じゃない、あんたを育てたあたしが思うんだからまちがいないよ。あんたには家族が必要だよ」

057.

その夜、桧山は奈々子の夢を見た。

久しく聞かなかった西ノ宮という名を耳にしたせいだろうか、と夕陽の中の奈々子のシルエットに近づきながら考え、これは夢だ、と夢の中の自分に言い聞かせていた。

奈々子は昨日の続き、いつもの待ち合わせのような親しみと日常性をみせて彼に笑いかけた。

今にも、今日は数学の宿題手伝って、と困った顔で言い出しそうだった。

だが彼は奈々子のスリーブレスの白いワンピース姿は記憶になかった。

夏をいっしょにすごすことはなかった……これからもないのだ。その想いは涙となって頬を伝った。

奈々子の手がそっと頬に触れてきた。

唇が動いている。

……泣かないで……

声が聴きたい、奈々子の声が聴きたい！

だがそう伝え、訴えたい自分の声がでなかった。

奈々子はゆっくり横を向き、からだの向きを変えた。
長い黒髪をかけた耳元の、白い小花とうす緑のリボンをどこかでみたような気がした。

……どこでみたんだろう……

奈々子は振り向いて彼を見上げ、なにか言った。唇が動いていた。

聴き返そうとする彼に輝く笑顔が残された。

あたり一面に橙の色が満ち、金色の光が溢れていた。

光の横溢が少しずつ静まり、奈々子の姿はすでに彼の手のとどかないところにあった。

素足がきらめく水を踏み、白い後姿が無音の残照の中に溶けるように消えていった。

058.

ひろもまた長い夢をみた。それも、こともあろうに、権田トオルの夢だ。
なんでゴンちゃんなのよ……

緑色に萌える草むらの間を流れる清流に身をかがめて、彼はなにかつまみあげた。イモリ、白いイモリだ。そいつは権田の指を逃れようと、もがき、するっとすり抜け、ひろの胸元に飛び込んできた。

以来、そいつはひろにくっついて離れようとしない。権田が引きはがそうとしても、両手両足で力いっぱい踏ん張って、なにがあっても離れまいとする。その姿があんまり健気でおかしくて、ひろは、へえ、この子、後ろ足の指は五本で前足の指は四本なんだということまで観察した。

　おまえの気持ちは、よーくわかったわ。いつまでもいっしょにいようね

そう約束したのに、そいつはいつの間にか、桧山にとりつき、桧山から離れようとしない。

　あらま、この子、誰でもいいのかしら、と思ったがそうでもなかった。権田の手からは逃げまくるのだ。

　おかしな子！

ひろはくすくす笑う。ぶっきらぼうなうえに無表情で愛想のない桧山が、赤銅色に日焼けした肩に貼りついている白いイモリを見て、目で笑っている。

春の明るい日差しに赤い目がきらめくのをみて、ひろは、はっとした。アルビノ、という言葉が浮かんだ。誰が言ったんだっけ？　ああ——ひやまさんか——

　とたんに目が覚めた。

　私はだれ？　ここはどこ？　ときょろきょろすると、灰色の濃淡の闇の中にうずくまっている妖精と目があった。妖精はにっこりと笑って「おはよう」と言った。
　遮光カーテンのおかげで室内は暗かったが、日はすっかり高いところにあり、ひろはめくったカーテンをすぐに閉めてしまった。
　おなかがくうくう鳴っている。夕べ晩ごはん食べないで寝ちゃったんだ、と思い至り、部屋へ戻ってくるまでの記憶を遡りかけて、ぱっと立ち上がった。
「ご、ごめん。あたしシャワー浴びてくるわ！　わーも一汗でべたべた」
　ななこはにこにこしながらうなずいた。

　昨夜のことはあとでゆっくり考えようと、手っ取り早くシャワーを使い、着替えをすませた。浴室の入り口においてある荷物は昨日父が届けてくれたものだ。

勉強机の上にもなにやら伝言がおいてあったし、お父さんに電話しなきゃ、とふと携帯をみると、メールの着信が何件もあった。

なによ、だれからよとおそるおそる開けてみると、メールは全部陸上部の河合マネージャーからだった。
緊急部会を開きたい旨、時間は12時から、場所は湖岸通り三丁目の「かわい亭」、何通ものメールを解読してそこまで要約するのに二十分かかった。
「『かわい亭』で緊急部会ってなに？　あんな騒々しいとこで部会になるわけないじゃない」

ぶつぶつ言ってみたが、河合マネもまた中断した合宿の鬱憤晴らしを図りたいのだろう、と思う。ひろもまた望むところだったし、おなかもすいていた。
「あたし、ちょっと出かけてきたいんだけど……」
ヘアブラシを手にしたまま、ななこにわけを話した。
（ななことも話さなくちゃならない、それから桧山さんにも……）
ななこは、うん、と素直にうなずいた。
「ごめんね、部会が終わったらすぐに帰ってくるからね！」
そういっている最中にも河合からメールが送られてくる。まだか、早く来いというのだ。
「もー！　まだ11時半じゃない！！」
ななこにもう一度「ちょっと待っててね、ごめん！！」と手を合わせて拝み、部屋を飛び出した。
ななこはひろが中途半端にあけたカーテンのすきまから、日焼けした手足で自転車に飛び乗り、真昼の陽光の下に出て行くひろの後姿を見送った。

緊急招集された部会は緊急だったにもかかわらず、うっぷんを抱えた多くの同志の参加者を得、おおいに盛り上がり、お開きになったのは夕方だった。
『かわい亭』のマスター父子が言葉巧みに客を帰したがらなかったせいでもある。
まだ名残惜しそうにしている河合マネたちにそそくさと挨拶して、ひろは店を飛び出し、マンションまで自転車を走らせた。

マンションのエレベーターが下りてくるのを待つのももどかしく、階段を二段いっぺんに駆け上がって部屋にたどり着き、激しい動悸をなだめながら開錠した。

　いやな予感とはよく当たるものだ。鍵を回した瞬間にいつもとなにか違う感じがした。ドアノブを力任せにひっぱり、スニーカーを脱ぎ散らかして部屋に駆け込む。

「ななこ！！」

　灰色の闇がただ部屋を満たしていた。ななこがいた時と雰囲気がぜんぜん違う。誰もいない。からっぽ。
　ひろは脱力感に襲われながらクローゼットもトイレも、浴室も、部屋中のドアを全部開けてみた。部屋中を見回してみた。ななこの痕跡がひとつでも残っていないか、体中で感じ取ろうとした。

「ななこ！！」
　声に出して、心の中で、幾度も呼んだが答えはなかった。

　――なんで！？　どうして！？

　――待ってて、ってたのんだじゃない！！　　そしたら、うんっていったじゃない！！　　まだ話の途中だったじゃない！！

　自分で中途半端に開けたカーテンに気づき、がくがくする足で窓辺に近寄った。すると偶然、裏の従業員用駐車場からまわってきた桧山をみつけた。
　夢中でカーテンと窓を押しのけテラスに出、大声で呼びとめた。六階からいきなり名前を呼ばれて桧山はびっくりして立ち止まった。
「桧山さん！！」
　テラスの手すりは転落防止のためもあってかなり高さがあったが、、ひろはその上から身を乗り出して大声で呼んでいた。桧山は、なんて大胆なやつだ、と思った。いっしゅん、毎朝あんなことをされたらたまらん、とこっそり思った。だがひろは彼の秘めた思惑とはぜんぜん違うことを叫んでいた。

「いないの！！　いなくなっちゃった！！　呼んでも帰ってこない！！」

　彼は両手で大き目のダンボール箱を抱えていた。中身は壁クロスの見本でかなり重く、早く下におろしたかった。いきなり呼び止められ、いきなりわけのわからないことを言われて、さすがにうんざりして、箱をゆすりあげながら適当なことを言った。
「――そうか、わかった！！　――おまえの同居人は、人じゃなくて――」
「！！！！！！！」
「ネコだろう！？」
「……」

ひろは押し黙って、なにか投げつけるものはないかと探した。部屋に取って返し、この間までカスミ草を活けていたクリスタルの花びんをもってきた。
「人の気も――」桧山に向かって投げつけようと大きく振りかぶった。「――知らないで！！」

ちょうどそのとき、部屋の奥で電話が鳴ってひろの動きを止め、ひろは、はっと振り向いてそのまま奥へ消えた。
桧山はてっきり花びんがとんでくると思い、すかさず箱を放りだしてしまっていた。壁クロスの見本が箱から飛び出して散らばった。熱いコンクリートの上にかがみこみ、西日に背を灼かれ、ひろを呪いながらそれを拾い集めた。

送受器をにぎったままテラスから下をのぞくひろの血相が変わっていた。桧山はもうそこにいなかった。
「……事務所だわ！！」
脱ぎ散らかしたスニーカーを足で寄せ集めながら、自分の携帯電話を引っ張り出した。バッテリー切れだった。
間宮宮司からの連絡を、ひろは今までうけとれなかったのだ。

4・「いなくなっちゃった！　呼んでも帰ってこない！」

5・「さようなら」へ続く

奥付

nanako-fifteen　Ⅱ

4･いなくなっちゃった！　呼んでも帰ってこない！

2025年 1月20日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　「Designer」

「NEO HIMEISM」

制作　　Puboo

発行所　　デザインエッグ株式会社